

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Dietary patterns during pregnancy and health-related quality of life: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル: 妊娠前期における食事パターンと健康関連QOL: 子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

ユニットセンター(UC)等名: 富山UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: PLoS One

年: 2020 月: 7 巻: 15 頁: e0236330

筆頭著者名: 三浦 佳代子

所属UC名: 富山UC

目的:

妊娠期における母親の食生活状況や栄養バランスは胎児の成長に影響するだけでなく、母親の心身の健康を左右する重要な要因である。本研究では、妊娠前期(妊娠前～妊娠初期)における日本人女性の食事パターンを同定し、その食事パターンと健康関連QOL(HRQOL)との関連を明らかにすることを目的とした。

方法:

子どもの健康と環境に関する全国調査データより92,448人の母親のデータを用いた。母親の食事状況および栄養摂取状況は食事摂取頻度調査票(FFQ)、HRQOLは健康関連QOL尺度(SF-8)によって評価された。主成分分析によって食事パターンを抽出し、各食事パターンと精神的・身体的HRQOLの関連性をロジスティック回帰モデルを適用した多変量解析により検討した。

結果:

妊娠前期の食事傾向を調べた結果、西洋食、日本食、偏食の3つの食事パターンが同定された。精神的・身体的HRQOLの低い人は日本食パターンの高い摂取と有意に関係していた(調整オッズ比は精神1.2, 身体1.1, 共に $p < 0.01$)。西洋食パターンの高い摂取群は最も低い群と比べて身体的HRQOLの低い人が0.9倍少なかった(全て $p < 0.01$)。偏食パターンの最も高い摂取群は最も低い摂取群と比べて精神的HRQOLの低い人が1.29倍多かった($p < 0.0001$)。

考察:(研究の限界を含める)

日本食パターンの摂取傾向が非常に高かった妊婦は精神面および身体面の両方においてHRQOLが低かった。中量程度に摂取していた場合にはHRQOLの低さと関連していなかったことから、日本食がHRQOLに悪影響を及ぼすというわけではなく、摂取し過ぎるとかえってHRQOLが良くないことが示唆される。過剰な健康志向は不健康につながることで報告されているため、「健康的」とされる日本食摂取へのこだわりが主観的健康観の低さに関係していた可能性もある。洋食及び偏食パターンは、身体的に健康であると感じていたために摂取量が増えていたのかもしれない。しかし、本研究は横断研究のため、因果関係については明らかでない。

結論:

日本人妊婦独自の食事パターンとして西洋食・日本食・偏食の3つの食事パターンを同定できた。また、妊娠前期における食事パターンとHRQOLは有意な関連性がみられた。妊娠期の女性は食生活に敏感になりやすいことから、心身の健康感の関連因子についても正しい知識を提供し、適切な指導・助言を行うことが重要である。